京都大学	博士（文学）	氏名	久冨峻介
論文題目	初期ドイツ観念論の「学」の精神史		

（論文内容の要旨）

本論文は、初期ドイツ観念論における「学」構想を巡る、当時の詳細な議論状況を明らかにすることを通じて、カントの批判哲学以降勃興したドイツ観念論において、どのような問題が提起され、それによってどのような立場をそれぞれの論者がとるようになったのかを明らかにするとともに、ヘーゲル（G.W.F.Hegel 1770-1831）の『精神現象学』（1807年）における「学の構想」が、まさにこうして提起された学の基礎付けをめぐる諸問題に取り組み、それに一定の解答を与えようとしたものであることを明らかにしようとするものである。本論文の構成は以下の通りである。

序文

第１部：初期ドイツ観念論の問題圏：スピノザとカント

第１章　１８世紀ドイツにおけるスピノザをめぐる論争

第１節　スピノザ論争「前史」：ドイツ啓蒙主義におけるスピノザ像の変遷：「宿命論」「無神論」としてのスピノザ

第２節　スピノザの「再発見」：1755年から始まる「スピノザ主義」の萌芽と「汎神論論争」（1780 - 1789年）の争点

第２章　カント哲学の遺産：哲学の「根本原理」とその理論的進展（Ⅰ）：ヤコービ、マイモン

第１節　カント哲学の遺産　（Ⅰ）：「建築術」としての哲学

第２節　カント哲学の遺産　（Ⅱ）：ヤコービによるカント批判、「物自体」問題と「因果性」の超越論的使用

第３節　懐疑論からの応戦：サロモン・マイモンの「超越論的哲学」

（１）カントvs. マイモンの「神的な知性」論：カントの『超越論哲学試論』評から

（２）マイモンの「スピノザ主義」：神の「制限」と〈「窓のシャッターを閉めろ」の逸話〉

第２部：青年期ヘーゲルの「修業時代」と哲学への「転向」宣言のコンテクスト

第３章　テュービンゲン・シュティフトにおけるフラットの「形而上学」

予備考察：1800年11月2日付けヘーゲルのシェリング宛書簡から

第１節　シュティフトの教授陣と学生たち

（１）シュティフトの名物教授
（２）シュティフトの学生たちと「補習教師」
（３）反カント陣営と親カント陣営との論争
第２節 フラットのカント論の源泉：ウルリッヒの『教程』におけるカントの「拡張」
第３節 「形而上学者」フラットのカント論：シュティフトの「超越論哲学」受容の一側面
（１）フラットによるカント関連の書評の要点
（２）ヤコービ書評におけるフラットのヤコービ批判
（３）『断章』（1788年）の「因果性」理論：作為的理性と自然的信
第４章 カント哲学の遺産：哲学の「根本原理」とその理論的進展（Ⅱ）：フィヒテ
第１節 「知識学」の基本的な課題
第２節 「知識学」は「スピノザ主義」か？
（１）「主観的スピノザ主義」としての「知識学」
（２）「転倒したスピノザ主義」としての「知識学」
第３節 フィヒテvs.「批判的懐疑主義」（Ⅰ）：1793年10月の「階段での哲学談義」から『エーネジデムス』へ
第４節 フィヒテとフラットの「友情関係」：フラット的「因果性」から「事行」へ
第５節 フィヒテvs.「批判的懐疑主義」（Ⅱ）：マイモンの「連合体系」の非体系性
（１）マイモンの基本的な立場（ⅰ）：スピノザ主義への批判
（２）マイモンの基本的な立場（ⅱ）：「無限な知性」・「物自体」と「事実問題」
（３）フィヒテによるマイモンとの対決
第５章 フィヒテ - シェリングの論争：「知的直観」をめぐって
第１節 フィヒテとシェリングの知的交流
（１）「スピノザ主義者」シェリング？：『エチカ』との対決
（２）「フィヒテ主義者」シェリング？：「知識学」との対決
第２節 若きシェリングの介入：当時の論争における「自我」論文の立ち位置
第３節 「自我」論文における「知的直観」論
おわりに
第６章 「私たちの精神の連盟の時代」：フランクフルト - ホンブルク・コンステラツィオンのキーコンセプトとしての「生」

はじめに
第１節 「精神の連盟」のコンテクスト：ヘルダーリンの哲学的思惟
第２節 シンクレーアに対抗するツヴィリンク：ヘーゲルの関係論的思惟の源泉
第３節 哲学への道
第７章 イェーナ前期の思索の意義：「絶対的精神」論としての「芸術」「宗教」
第１節 イェーナ初期ヘーゲルの「芸術」と「宗教」概念の概要
（１）シュライアマハーとの対決：「芸術作品」としての「芸術」／「作品なき芸術」としての「宗教」
（２）人倫の理論としての芸術論
第２節 『精神現象学』における宗教と芸術の関係
（１）「芸術宗教」の到達点としての「喜劇」
（２）「芸術作品」の「想起＝内面化」：「芸術」から「宗教」への移行
第３部：ヘーゲルの「学」構想の階梯：『精神現象学』の方法論的基底としての「無限性」論
第８章 「無限性」としての「転倒した世界」
はじめに
第１節 「意識」章の概観と「悟性」章のテーマ
第２節 力の弁証法と説明の弁証法：ヘーゲルの自然科学批判
第３節 転倒した世界の論理
（１） 「転倒した世界」の先行研究の概観
（２） 「転倒した世界」論解釈
おわりに
第９章 「無限性」の具体相としての「生命」論と「承認」論
第１節 「自己意識」の構造とその対象：「欲望一般」としての「自己意識」
第２節 「無限性」の二つの側面：自己意識と生命
第３節 欲望としての自己意識の経験と承認への移行
第４節 無限性の実現としての承認の運動
おわりに
第１０章 「良心」の「相互承認」論の方法論：「良心」の「言語」論とイェーナ期草稿からの発展
はじめに
第１節 イェーナ期体系構想における承認論と言語論
第２節 言語の観点から見た不完全な承認

第３節 相互承認において良心の言語が担う役割
おわりに
補論 『アンティゴネ』における「共同体のイロニー」：Ch. メンケの主体形成論としてのヘーゲル悲劇論解釈から
第１節 メンケによるヘーゲル悲劇論の概要
（１） ヘーゲル悲劇論読解の狙い
（２）主体化のプロセスとしての悲劇読解
第２節 メンケによるヘーゲル悲劇論の検証
（１） 『精神現象学』「精神」章の特徴とアンティゴネ像
（２）メンケの解釈の問題点とヘーゲルの悲劇論の射程：「イロニー」について
おわりに
第４部：「学」の体系としての『精神現象学』
第１１章 「学」の必然性とは何か：「カオス」から「秩序」へ（１）
第１節 「現象学」というプログラム：『精神現象学』前史
第２節 『精神現象学』の「論理」問題：「現象知」と「学のモメント」
（１）『精神現象学』の「欠陥」：ヘーゲルのシェリング宛書簡から
（２）「学」の方法論と「必然性」
（３）「現象学の論理」：「論理学的必然性」の消息
第３節 「必然性」の行方：「歴史的必然性」と「想起」論
第１２章「宗教」章冒頭部の課題とその統体化機能：「カオス」から「秩序」へ（２）
第１節 『精神現象学』の「自著広告」（１８０７年１１月）
第２節 「宗教」章の幾何学的図式論の意義：「進展」と「還行」
（１）「単一な統体性」とは何か：「直線」と「円環」
（２） KnotenとBund：「単一的統体化」論
（３）「統体化」の論理としての「三つの規定性」
第３節 批判的応答：「統体性」論の体系的意義について
第１３章 「絶対知」は成立したのか：ヘーゲル青年期１９年の総決算
第１節 『差異論文』における「精神の連盟」からのモチーフの継承
第２節 「絶対知」章の構成とその課題
第３節 「現象知」の概念的再編成としての「三つの頂点」論
（１）「観察する理性」／「理性」章：「無媒介な存在」
（２）「啓蒙」／「精神」章Ⅰ：「相関関係」「対他存在と対自存在」
（３）「道徳的自己意識」「良心」／「精神」章Ⅱ：「本質」「普遍的なもの」

（４）「三つの頂点」を集約する「良心」
第４節 「達成されるべきプログラム」としての「二重の宥和」
（１）「形式」と「内容」の一致はいかにして正当化されるのか
（２）「啓示宗教」の概念的モメントの「リズム」
第５節 ヘーゲルにとって「絶対知」とは何だったのか
総括：ヘーゲルはいかにして「哲学者」になったのか
1794‐1795年時系列年譜：シェリング、フィヒテ、ヘルダーリン、ヘーゲル
参考文献一覧

以下、各章の内容を要約する。

第１部「初期ドイツ観念論の問題圏：スピノザとカント」では、初期ドイツ観念論の問題機制を規定している「カント」と「スピノザ主義」の思想史的意義を解明すべく、18世紀ドイツにおける「スピノザ主義」像の変遷と、『純粋理性批判』が持っていたインパクトを描き出している。第１章では、ライプニッツ‐ヴォルフ学派による「スピノザ主義」への「無神論」「宿命論」批判の経緯を追い、もっぱら神を否定する危険思想のレッテルとして機能していた「スピノザ主義」にたいし、この偏見を是正し、新たなスピノザ像をドイツにもたらしたのが、ヤコービであることを示す。第２章では、『純粋理性批判』のうち「建築術」としての哲学体系に着目しつつ、同書へのヤコービの反応を「物自体」問題、「因果性」論から論じ、さらにこのふたつの問題をめぐるカントとマイモンの論争から「スピノザ主義」批判とマイモンの「神的な悟性」論の関係が明らかにされる。

第２部「青年期ヘーゲルの「修業時代」と哲学への「転向」宣言のコンテクスト」では、テュービンゲン・シュティフトで大きな影響力を持っていた員外教授フラットの思想から、ドイツのカント受容の実像が明らかにされる。フラットのカント解釈は「因果性」論に集中しており、その成果が『断章』（1788年）としてまとめられているが、この『断章』がウルリッヒとシュルツの著作、書簡の延長線上にあることを明らかにしている。さらに、フラットのヤコービとの共通点と差異を明らかにしつつ、これらの論争が「理性」と「感性」（作為的理性と自然的信）の区分を背景にしていることが示される（第３章）。

次に第４章では、「カント哲学の遺産」としてフィヒテの初期知識学構想の理論的立脚点が解明される。著名な『全知識学の基礎』だけではなく、その準備稿である「私独自の考察」や「実践哲学」、さらに当時の書簡などを包括的に突き合わせることで、フィヒテの問題意識の深まりと、彼の課題の所在を明らかにしている。さらに、スピノザ主義が各論者によって意味されていること

が異なっていることを詳細に明らかにし、通例フィヒテに大きな影響を与えたとされるシュルツェ（エーネジデムス）とマイモンのインパクトが相対化される。

第５章では、フィヒテとシェリングの論争における知的直観論を取り上げ、フィヒテの学的方法論を際立たせるとともに、シェリングにおいて「絶対者」に到達するための通路としての「スピノザ主義」（具体的に言えば、『エチカ』の「第三種認識」）が問題になっていることが解明される。それによって、シェリングがある面では「スピノザ主義者」であるものの、同時に「フィヒテ主義者」でもあることが指摘される。

第６章では、ヘーゲルへと移り、彼の関係論的発想が、実はフランクフルトでのヘルダーリン、シンクレーア、ツヴィリンクらによる「精神の連盟」での議論を通して醸成されたものであることが明らかにされる。彼らは、フィヒテの知識学に影響を受けながらも、フィヒテの発想を転換させることで、むしろ失われた「統合」を再建する道を模索していた。この「統合体」の思想が有名な「スピノザ主義」のスローガン「ヘン・カイ・パン」に繋がるのである。著者はさらに、当初は区別を含まない「無差別態」として構想されていたこの「統合体」が、次第に全体論的、関係論的に考察されるようになったことを明らかにする。

第７章では、イェーナ期のヘーゲルの「芸術」「宗教」論における「絶対者」が取り上げられ、ヘーゲルの「芸術宗教」論の特質を、シュライアマハーのそれとの比較を行なうことで一層明確にする。ヘーゲルの芸術論は、徹頭徹尾宗教論に規定されているものの、私たちが芸術そのものをいかに享受、鑑賞するかという方針を示してもいるのである。

第３部「ヘーゲルの「学」構想の階梯：『精神現象学』の方法論的基底としての「無限性」論」では、「精神の連盟」から引き継がれた全体論的思惟を「無限性」論として抽出し、これを『精神現象学』「意識」章の「転倒した世界」論における「無限性」概念に結び付ける。さらにこの無限性と密接に関連した「自己意識」章の「生命」論、ならびに「精神章」における「良心」論を検討し、特に「良心」論においては「言語」概念に着目しながら、他者との相互承認関係に至るプロセスを明らかにし、ヘーゲル固有の相互承認のロジックの基礎が「無限性」論にあることを明らかにする。

最後に、第４部「「学」の体系としての『精神現象学』」では、『精神現象学』が本来課題にしている「学」の「生成」の理路が解明される。著者は、とくに「宗教」章「絶対知」章がヘーゲル以前のドイツ観念論において議論されていた、体系における部分と全体の関係の問題や、学の始元と生成という問題に対する回答であるという見立てのもと、ここでヘーゲルが提示している議論

を〈カオスから秩序へ〉というスローガンのもとにまとめている。「学」としての『精神現象学』は、完全に根拠づけられた「始元」から出発するのではなく、さしあたり暫定的な「始元」から「体系」の叙述を始めることを認める。だが、それでは「学」全体が根拠づけられず、「モメント」がひとつの統一的な理念のもとに統合されえないという困難に突き当たる。著者はそれに対するヘーゲルの解決策が「宗教」章「絶対知」章のうちに認められるとする。著者によれば、『精神現象学』において「論理的規定」は常に「意識の形態」の「背後」にしか存在せず、この「背後」の「論理」が（α）「無媒介な存在」、（β）「相関関係」「対他存在と対自存在」、（γ）「本質」「普遍的なもの」と同定される。これまでのヘーゲル研究では、そうした「精神現象学の論理」が『精神現象学』前後に執筆された「論理学」構想と一致するはずであるという誤った想定に基づいた「一対一対応関係」説が採られていたが、これに対して、著者は「論理」と「現象」が「一対多対応」することを主張する。

最後の第１３章では、『精神現象学』「絶対知」章をこの「一対多対応関係」の洞察という観点から解釈することで、上記の著者の主張が補強される。筆者によれば、これによって明らかになる『精神現象学』の方法論上の意義は、次の三点である。①「学」の「モメント」はたんなる「寄せ集め」では「全体」にならない。だが、その「モメント」の暫定的な生成において、それと相即して生じる「論理」を事後的に見通すことで、学的理念のもと「部分」を「モメント」に転換することができる。②暫定的な「始元」は、この事後的な洞察（ヘーゲルの言う「想起」や「概念把握」）によって、真の「始元」たるべく、「モメント」の展開とともに事後的に根拠づけられる。そう考えることによって、私たちは予め絶対的に確実な第一根本命題から出発せずとも、根拠づけられた原理によって「体系」を構築することができる。言い換えれば、『精神現象学』は「カオス」のなかから「秩序」を見いだすことで、「カオス」の実相が「秩序」だったことが事後的に判明するという仕掛けになっている。③ヘーゲルは、「論理」が「意識の形態」（＝「現象」）に即して登場すると理解することによって、いきなり「思弁」の領域から「学」を始めるのではなく、有限な立場からの媒介過程を描いてもいる。こうした媒介のプロセスが存在することによって、フィヒテ、シェリング、ヘルダーリンのように「知的直観」に頼る必要もなく、また「精神の連盟」のメンバーが考えていたように、最初から理想的な「全体」から始めるのではなく、その「始元」や「生成」について語ることができるのである。

以上より、『精神現象学』の行程は、根拠づけられていない暫定的でカオス的な「始元」が、その終局において根拠づけられることによって、学的で秩序

づけられた「始元」へと「生成」する行程であるとされる。こうして、この〈生成する始元〉という方法論上の理念こそ、初期ドイツ観念論で幾度となく繰り返されてきた「因果性」論、「学」の基礎づけに対するヘーゲルの解答であると著者は結論づける。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、ヘーゲル『精神現象学』における「学」の構想を、カントの『純粋理性批判』以降の、いわゆるドイツ観念論において学の基礎付けをめぐって提起されたさまざまな問題を解決すべく構想されたものとして解釈する、極めて野心的かつ重厚な論文である。特筆すべきはここで議論されている「ドイツ観念論」として、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルといういわゆる三大ビッグネームはもちろん、二十世紀初頭以降たびたび描かれてきたドイツ観念論史において取り上げられるラインホルト、ヤコービ、シュルツェ、マイモンといった比較的著名な哲学者たちにもとどまることなく、フラット、ウルリッヒ、シンクレーア、ツヴィリンク、シュラアマハーそして詩人ヘルダーリンといった、哲学史上においては比較的知られていない論者たちの議論が詳細に扱われている点である。

本論文は、大きく前半（第一部・第二部）と後半（第三部・第四部）に分けることができる。前半部では、１７８１年のカントの『純粋理性批判』の刊行が引きおこした、１７９０年代に至るまでのドイツの哲学的議論状況を、上記のようなさまざまな論者たちを取り上げながら浮き彫りにしていく。そこで問題になるのは、批判主義とその体系化の試み、そしてそのスピノザ主義との対決ないし影響関係、学の基礎付けと根本命題をめぐる論争、知的直観、芸術と宗教の役割といったさまざまな主題であるが、筆者はそれが１８０７年のヘーゲル『精神現象学』の前史をなしているとの見立てをたてる。

後半部では、そうした初期ドイツ観念論で提起された問題を踏まえてヘーゲル『精神現象学』を、学の基礎付けという観点から解釈検討する。著者は、まず、「悟性章」における無限性概念、「自己意識章」における生命概念、「精神章」良心論における承認論を検討することで、「無限性」がヘーゲル『精神現象学』の核心をなす論理であることを明らかにする（第三部）。さらに、第四部では、ヘーゲル自身が『精神現象学』の構造を論じた箇所としてたびたび言及される宗教章冒頭部の議論にかんする独自の解釈を提示し、そこから「絶対知」章をさらに解釈することで、ヘーゲルが、学の始元と基礎付けという問題についてどのような解答を与えたのかを明らかにする。それによって、著者は「一対一対応」によって「現象学の論理」を明らかにしようとする従来の解釈の誤りを指摘し、（α）「無媒介な存在」、（β）「相関関係」「対他存在と対自存在」、（γ）「本質」「普遍的なもの」の論理が、現象に対して「一対多対応」しているという新たな解釈を提示する。またこれによって、ヘーゲルが知的直観に訴えることなく、学の始元を暫定的に設定しながら、その「カオス」が最後に論理によって基礎付けられるという独自の学的構想を実現したと結論づける。

本研究は、大変浩瀚なものでありながら、各章における論述は明確で、膨大

な関連するテーマに関する文献を十分に消化しながら、明確に過去の文献の誤りを指摘し、自分の立場を明瞭かつ説得的に打ち出している。特に、第一部・第二部のドイツ観念論の発展史をめぐる箇所は、この五〇年間の、ヘーゲルの発展史研究、カントからヘーゲルまでのコンステラチオン研究を消化し、手際よくまとめられている。特にスピノザ主義を軸としてそのプロセスをまとめることで、極めて見通しのよいものとなっており、大変すぐれたドイツ観念論史の記述であるといえよう。以上が本論文の第一の長所である。

第二の長所として、ヘーゲル『精神現象学』の体系構成問題（「現象学の論理学問題」）という、これもまた戦後ドイツのヘーゲル研究において大きな論争の的となりながら、その後問題解決が見られることなく下火となっていた問題を再び取り上げ、これにまったく新しい解釈と解決策を提示している点があげられる。筆者は、その論証にあたって、これまでの解釈を網羅的に検討しながらそれらの解釈の問題点を指摘しており、本論文がこれまでの研究がとらわれていた「一対一対応」図式に代わる、新たな「一対多対応」解釈を打ち出したことは、『精神現象学』研究史において大きな貢献だと言えよう。

以上のように本論文は、非常にすぐれた点を持っている。しかし、欠点がないわけではない。

第一に、本論文のうち、ドイツ観念論史を主に扱う前半部（第一部・第二部）と『精神現象学』解釈を提示する後半部（第三部・第四部）との接続が、論述上あまり明確にされていない点である。学の始元と基礎付けという問題は最後に回収されているとはいえ、スピノザ主義・汎神論、自由、信と知といった問題を、ヘーゲル『精神現象学』がいかに受け止め、どう解決したのかは必ずしも明らかとなっていない。前半部のドイツ観念論の記述がたいへん豊かな記述となっていることによってかえって、『精神現象学』につながる問題としての脈絡を十分に展開できていないという懸念が残る。

第二に、ヘラクレイトスやプラトン、ソフォクレスなど本論文で言及される古典的テキストについて、ドイツ観念論当時の読解水準が十分に踏まえられているかという点についても、疑問が残る。とくに、シェリング、ヘルダーリン、ヘーゲル等の世代は古代ギリシアに理想を見出しつつ、実際に古典的テキストに取り組んでいたことが知られており、かなりの知識を持っていたことが推測される。だとすれば、本研究のような研究にはそうした当時の読解水準を踏まえていることが期待されるが、残念ながら本論文はそうした古典の知識について曖昧な点が見出される。

ただし、以上の問題は本論文の本質的な学術的価値を損ねるものではなく、特に二つ目の点はかなり高度な要求であり、本人も今後の研究の課題として自覚するところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値

あるものと認められる。２０２４年２月１９日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。